日光ケミカルズとコスモステクニカルセンターが合併

日光ケミカルズ（本社＝東京都中央区、宇梶静男社長）とグループ会社であるコスモステクニカルセンター（本社＝東京都板橋区、矢作彰一社長）は、２０２２年４月１日に日光ケミカルズを存続会社とした合併を行う。今後、両社は２０２２年２月開催予定の取締役会で合併契約を締結し、同年３月開催予定の臨時株主総会にて、合併契約の承認決議を行う。なお、合併に伴う商号変更はない。

グループビジョンである「ＮＩＫＫＯＬ ２５ for ２０３０ ～美しさの化学を、社会を想う科学に。」の実現に向け、今後の成長戦略を進めるため、スペシャリティケミカル製品の販売を担う日光ケミカルズと、研究開発を担うコスモステクニカルセンターを合併することにした。

販売と研究機能を一体化したシンプルな体制の下で一層の経営の合理化・効率化を実現し、提供価値の向上を目指す。また、新たにパーソナルケア・医薬品・化成品の３事業部を発足させ、よりスピーディに市場ごとの要望に沿った製品を提供できる体制を構築する。さらに、グループのコア技術であるコロイド化学と皮膚科学をベースにした、事業アイデアの創出とインキュベーションを専門に行う新規事業開発室を新設する。

新会社の概要／商号＝日光ケミカルズ株式会社▽所在地＝東京都中央区日本橋馬喰町１丁目４番８号▽代表者＝宇梶静男▽事業内容＝パーソナルケア・医薬品・化成品等の原料の研究開発及び販売、化粧品原料の輸出入、安全性評価・有用性評価試験の受託仲介、パーソナルケアビジネスのトータル・コーディネーション等▽資本金＝１億円▽創立＝１９４６年６月７日

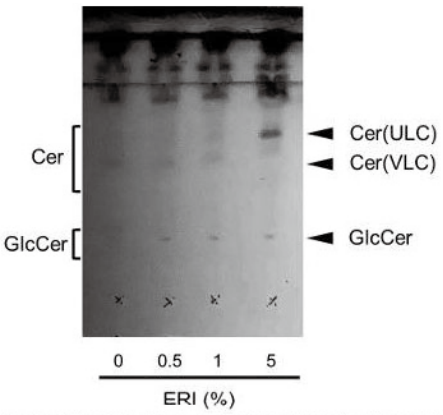
エー・アイ・システムプロダクト

還元水にセラミド産生を確認

エー・アイ・システムプロダクト（本社＝愛知県）はこのほど、日本薬科大学・薬学部・生命科学薬学分野（山本博之准教授）と共同で、化粧品などに使用されている自社開発原料「高機能還元性イオン水」がヒト角化細胞中のセラミド合成に関わる遺伝子の発現と、セラミド合成を内因的に誘引することを確認した。

今回の研究成果である「自己細胞由来のセラミド合成を促進する」ことは、使用者自身のセラミドを産生することを意味し、還元水・アルカリ電解水として世界初の報告となる。今後は、セラミド合成に関わる遺伝子に着目し、高機能還元性イオン水が持つ機能性のメカニズムについて研究を進め、さらなる用途開発を進めていくという。

「高機能還元性イオン水」は、ミネラル塩を含み、高い還元性を有する特性がある。還元水やアルカリ電解水として分類することができるが、一般的な還元水、アルカリ電解水がセラミドを含む脂質を溶かすのに対し、高機能還元性イオン水はその特性により細胞内の反応を活性化し、外部からセラミドを供給することなく、自己細胞由来のセラミド合成を促進することで、効果的に肌のバリア機能、保湿能の向上が得られることがわかった。



ERI原液を肌に塗布して角層より深い角化細胞へ届くまでに水分、脂質等によって希釈されると想定し、試験濃度は５％以下で観察した。

ナールスコーポレーション

松本会長が旭日単光章を受章

このほど発表された２０２１年秋の叙勲で、エイジングケア化粧品原料「ナールスゲン」の製造会社であるナールスコーポレーション（本社＝京都市）の松本和男会長が旭日単光章を受章した。

松本和男氏は京都大学・大学院卒、田辺製薬出身。２００９年から起業家として活動し、２０１２年３月に大学発ベンチャーとしてナールスコーポレーションを設立。代表取締役を経て19年より会長に就任した。化粧品原料「ナールスゲン」は、アミノ酸構造を特徴とし、選択的なγ－グルタミルトランスペプチダーゼ（ＧＧＴ）阻害作用により表皮や真皮の細胞を若返らせ、肌に本来備わる再生機能や修復機能を高める働きが認められており、従来のエイジング系原料のメカニズムとは異なる特性をもつ新規性の高い原料として注目されている。ナールスゲンの販売元はＪＴＳ（本社＝大阪）で、既に様々な化粧品に配合されている。

松本会長

私のＨ＆Ｂ日記

厄投げ

「厄投げ」というイベントを知っているだろうか。子どもを中心に神社や公園に集まってもらい、厄年の人々が紙に包んだ小銭やお菓子を投げて、拾った人に厄を少しずつ持ち帰ってもらおうとするものだ。

これは、私の小学生時代における一大イベントであり、お年玉に次ぐかき入れ時であった。最近知ったが、これはどうやら長野県諏訪地域特有の風習であるらしく、他県の人には全く伝わらない。

お小遣いを増やすための絶好のチャンスである一方、子どもたちの間では熾烈な争いが繰り広げられていた。御捻りの金額は、10円玉5枚のこともあれば、１００円玉が何枚も包まれていることもある。

小学1～2年生の子はお兄さんやお姉さんから御捻りやお菓子を譲ってもらえることもあるかもしれないが、中学年を超えるとそういった甘い世界はない。まさに弱肉強食といえるだろう。

ただ、時折ビニール袋を掲げてたくさんの御捻りを手に入れようとする人がいたが、さすがにそれはルール違反だろうと思った。

厄投げは、毎年1月中旬頃に行われていたように思う。長野県は関東に比べると雪が多いので、たまに天候の影響で厄投げが中止になったりして、心底がっかりしたものだ。

女性は19歳と33歳が厄年とされているが、19歳のころは既に上京していたため、厄投げをする側に回ったことはない。小銭ではあるものの、何枚も包むため、結構な金額になるという。

また、諏訪地域特有の文化といえば、一番に御柱祭が挙げられるだろう。7年に一度しか行われないため、高校生まで諏訪市で過ごした私も数回しか経験したことがない。今から1200年以上前から行われている伝統的な祭りで、日本三大奇祭としても有名だ。

幼き頃の私も、丸太に乗って斜面を降りた覚えがある。伝統ある祭りであるものの、毎回のように死者が出る危険な祭りとしても知られている。次回の御柱祭は、寅年となる来年2022年に行われる予定だ。（上）